
夢想花

ことみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想花

【Zコード】

N6705Y

【作者名】

ことみ

【あらすじ】

日本から宋の国にとばされ、国の重鎮のもとで生活していた神崎鈴音。ある日、彼女を訪ねてきた国の王太子の願いとは、彼女が正妃候補として王太子宮で暮らして欲しいといつもので・・・？

プロローグ

「こは宋の国。私の名前は神崎 鈴音^{かんざき すずね} 18歳。日本の女子大生をしていた。専攻は幼児教育。いずれ幼稚園の先生になりたいと思っていたものだ。しかし、現実はそうではなく宋の国にトリップしてしまい困り果てていた私を、宋の国の重鎮である、李 齊蓮^{り さいれん}様に保護され、養女にしてもらつた。齊蓮様は優しく、温厚なお方で、本当の父のように思つてゐる。

「鈴音様。旦那様がお呼びにござります。『足労いただけますでしょうか?』

「ええ、ありがとうございます、琉香。それでは、支度をしなくちゃね。お願ひできるかしら?」

かしこました、と琉香は私の支度をしていく。ここでは、養女の私も当主である齊蓮様にお会いするには略式の服装にならなくてはいけない。私のお世話係は何人かの侍女がいるが、筆頭は琉香だ。彼女は私と年も近く、いつも付き従う筆頭の侍女だ。今日もいつものごとく衣装を選び、丹念^{たんねん}に化粧を施し、琉香の先導のもといつものように、齊蓮様のお部屋へ向かう。よく話すことが多いけど、こんな朝早くからお呼びなんて珍しい。なにか、あつたのだろうか?

「琉香。朝早くのお呼び出しのこと、何か聞いている?」

「それは、旦那様自らご説明されるやつですわ。お早いいきましょ

う

「わ、わかつてます。まだ、衣装の裾が長いのに慣れないんだもの。」

・・・

略式の衣装といえど、上質の布が使われている。この国の女性なら

普段着なのだらうけど、私にしてみたら普段着からおしゃれ着に入るけどなあ。そうこうしているうちに、齊蓮様のお部屋についた。先触れの琉香が、伺いのノックをする。内からどうぞ、と声がかかりゆつくりと扉が開かれる。眩しい光の中、齊蓮様と・・・もう一人、若い男・・・?

「失礼します。鈴音様をお連れ致しました」

「ご苦労、琉香。さがつてくれ。あとでまた呼ぶから」

「承知いたしました。何かありましたら、お呼びくださいませ。失礼いたします」

そういうたやり取りの後、琉香は下がり、部屋には齊蓮様と私と、若くて気品のある男の3人に。みるからに威厳のある顔立ちや雰囲気だけ、今までに見たことないけどなあ・・・?一応、淑女の礼をとり挨拶をする。

「お初にお目にかかります。李齊蓮が養女、鈴音」といります。

本日はお越しいただき誠に恐縮でござります」

「いや、急にきたのはこちらの方だ。朝早くにすまないな、齊蓮、

鈴音」

「いいえ、我が君。行啓^{ぎょうけい}いただき、感極まつてござります。本来なら、こちらから行かねばならぬところを・・・」

深々と我が君、と呼んだ方に臣下から君主にする最高礼をしてるのを見て、目の前の男が高貴なる身分であることがわかる。行啓、といふのは王妃・王太后・王太子。王太子妃が外出することをいう。行啓が王が外 出することをさすみたいだ。詳しくはわからないけれど。。

「鈴音。こちらのお方は、この国の王太子、緋紫蘭様。御年20

歳であらせられる。

御存じだね？」

「はい。もちろんに『ござります』。それで、私がよばれたのにはどの
ような理由が『ござこましょうか？』

「それは、私が申そう。鈴音、そなたに頼みたいことがある」

「頼みたいこと、に『ござこますか・・・・・？』

やんごとなき身分のお方が、重鎮の屋敷にきて、そこの養女に頼み
ごと・・・？いつたいどんな頼みごとなんだ。なんか、想像つくけ
ど、なんか聞きたくないような・・・

「そうだ。そなたに、しばらく王太子宮で暮らしてもらいたいのだ
「・・・聞いてもよろしゅう『ございますか？』

「堅苦しいのはよせ。そなたも、言葉遣いに慣れぬ様子。ぐだけた
物言いでかまわん」

「なんでわかった、と言いたいが相手は偉い身分の人。くわえて、養
父は国の重鎮で私を保護してくれた人。くだけていっていってく
れてるんだ、それでいいじゃないか。

「では、失礼して。どうして、そんな大事なことを私に？もっと、
ふさわしい人とかいないんですか？」

「頼みたくとも、腹のわからぬやつばかりでな。齊蓮が保護してい
る女性がいるときいて、人柄などを日々聞くうちに、そなたならと
判断した。国の重鎮たる齊蓮の養女たる鈴音に、王太子宮で暮らし
てもらう。もちろん、正妃候補としてだ。よろしく頼む」

よろしく頼む、つて拒否権は・・・ないわよねー。あつたら、こ
んな朝早くからよばれないはずだ。仕方ない、齊蓮様に迷惑はかけ
れない。暮らすだけならいいわよ、暮らすだけなら。候補なら、あ

とで理由つけて帰れるだろうし。そう思っていた私の考えが大きく
覆されることはこのときは思いもしなかった。

プロローグ（後書き）

初書きです。応援よろしくお願いします

1・王太子宮へ

先日、宋の國の王太子である 紫蘭様がござられて正妃候補としてあがつてほしいといわれて紫蘭が帰ると、すぐに家令の 江來を始め、使用人たちが主である李 齊蓮の名に恥じぬよう、とぬかりなく輿入れの準備をしていく。他に何か言われるようなことがあつてはならない。慌ただしく数日がすぎ、輿入れの日となつた。

「鈴音様、本日のめでたき日を迎えたこと、我ら心よりお祝い申し上げます」

「ありがとうございます、江來さん。皆さんも、短い間ですが、お世話になりました」

「ありがとうございましたお言葉、しかと頂戴いたしました。琉香をお連れください。王太子宮へそば仕えの者をひとり連れてよいと、お達しがありましたので」

琉香が前に進み出て嬉しそうに微笑む。よかつた、彼女にはついてきてもらえたらと思つていたし。見ず知らずの世界で、親しいといえるのは養父である齊蓮と琉香だけなのだ。婚礼の行列は厳かに、王太子宮へと出発したのだった。長い行列にほう、とため息がもれる。

(日本の花嫁行列みたい・・・おばあちゃんが、言つてたつ。すぐ長い列だつたんだつて)

鈴音はそんなことを聞いているだけで見たわけではない。しかし、それを彷彿とさせるものが、婚礼の行列にはあつた。流れゆく景色の中で、前方にひときわ大きい建物が見えてきた。きっと、あれが王宮なんだろう。

「もうすぐですよ、鈴音様。つべ頃には紫蘭様とお会いできると思
いますわ」

「そうね。……」「しても、この花嫁衣裳、派手すぎないかしら？」

「こんなもの？」

「ええ。紅の衣装はお気に召しませんか？よくお似合いですよ。あ
あ、降りるときには裾を私が後ろよりたくし上げますから、」安心
くださいませ」

につゝりと微笑まれて、う、と面葉につまってしまふ。元々、おとな
しい性格の鈴音だ。やさしく言われるといやとは言えない。そう
こつしているうちに、行列は王太子宮へとついたようだ。鈴音たち
が乗る軒がゆつくりと、止まる。落ち着いてそつと降りる。後ろ
はまかせて大丈夫だ。

「よつゝや、鈴音様。我ら一同、今日この日を心よつお祝い申し上
げます」

一糸乱れぬ呼吸で王太子宮へ仕える者たちが跪く。最高礼をもつて
迎えられた。緊張のあまり言葉につまつそうになるが、口上をのべ
る。

「ありがとうござります。今日よつお世話をなる季 鈴音にござりま
す。よろしく」

「鈴音！来たか、待ちわびていたぞ！」

「わやつ」

体が軽くなつた、と思つたら突然現れた紫蘭に抱きあげられていた。
正装に包まれた紫蘭はいつもより色氣があり、はにかんだ笑顔に一
瞬、どきつとした。顔に朱がはしるのがわかる。

「び、びっくりするじゃありませんか、紫蘭様」

「紫蘭でいい。私たちはこれから毎日、顔をあわせるのだから。ああ、今までお前という存在を知らずにいた日々はなんともつたいないことが。だが、今日からは違う。私は鈴音といつ至宝を手に入れただのだから」

「し、紫蘭様・・・・・」

「紫蘭でいいと、いつておひつ」

ちこやく、紫蘭、とつぶやくと彼はそ�だ、と頷いた。今までこのような過剰にスキンシップや言葉をかけられたことがないのに、これがしばらく続くのだろうか。嬉しいようななんとも複雑な気持ちになつた。

2・紫蘭との再会

紫蘭との再会の後、まずはお茶をとこう」となり、鈴音がこれまでから住む部屋に案内される。部屋につくまでの間、鈴音はすつと紫蘭の腕の中に入った。・・・正確には、いふように言われた、だが。おろして欲しい、ところのままでよ、と返事が返ってくるため一度ほどそのやつ取りをした後、諦めたのだった。

「ここが今日から鈴音が生活する部屋だ。気に入つたか？」

「わあ・・・す」「こーーーーーーーで今日から生活するのね。ありがとう、

紫蘭」

「なに、このくらこのこと。そなたの輝く笑顔を見るためなら、でもあんなことなりなんでもしてやる

緋色の瞳が柔らかく細められ、愛しげに見つめられて、あわてて俯く。頬に熱が集まるのがわかる。そんな風に熱い視線をおくれたら、どう返していいのかわからない。頬に両手をあてながら、鼓動が静まるのを待つ。

「もう。そんなこと言つて、私が無理なことつたらどうあるつむりなの？」

「叶えられるなら、叶える。だが、鈴音はそんな女性ではないこと、わかってる」

「あ、ありがと」「・・・」

嬉しい。齊蓮から聞いていふとはいえ、そこまで信頼してくれるとは。そこへ、今まで控えていた琉香が、花茶を持ってきた。花茶はもてなしのお茶で有名である。お茶の中で、少しづつ花が茶の中で開いていくのが有名だ。

「これが、花茶なのね。・・・うん、おいしいわ。これは、紫蘭が手配してくれたのかしら?」

「ああ。そなたを歓迎する、ということをわかつてもらいたくてな。茶でいい表せるわけではないが。改めて、李 齋蓮が養女、鈴音。そなたを正妃候補として、心より歓迎しよ!」

紫蘭は鈴音を見つめながら、艶然と微笑んだ。心臓が跳ねたのがわかる。紫蘭の微笑みは心臓に悪い、と思う。そんなこといつたら、何が待ってるかわからないから、いつてあげない。でも、彼の笑顔を近くでみれるのは、今私だけ・・・この幸せが長く続きますように。

2・紫蘭との再会（後書き）

王太子宮編にはいります。齊蓮様、いつ再登場にしようか。
頑張ります！

3・憩いのひと

2人きりで落ち着いたところで、王と王妃に挨拶しにいかなくてはいけない、と紫蘭に言われた。今日は疲れているため、明日の朝のことだった。未だかつてない経験に、会つてもいいのに、緊張してしまつ。それをみてとつた、紫蘭が意外な行動に出た。

「なにを思いふけつている？今、目の前には私がいるところに、他の者のことを考えているだろう？…面白くない」

「…だ、だからって、いきなり抱きしめて、ほおにキスはびっくりするよ。し、しちゃダメつことじやなくて」

「私は、明日の謁見のことについて、考えてただけなのに…」

「そう気追うな。自然体の鈴音が、父王達も喜ばれる。そつだ、先にいっておくことがある。謁見で私の弟にあつことにもなるからな」

「弟…第2王子様？」

「そうだ。遙翔 という。今年11歳となつたところだ。今年1歳となつたところだ。まだやんちゃでな、こちらも少し手を焼くところだ」

仕方のないやつだ、と笑む彼の顔は親しいものだけにみせるもので、いかに遙翔王子を愛しているかが、わかるものだった。一体どんな王子なのか。私とは打ち解けてくれるのか。その時、紫蘭が席をたつたので、服の裾をひいて引きとめた。

「どうしたの、紫蘭？どこかへ行くの？」

「ああ、すまない。これから、残っている仕事をせねばならん。王太子としての務めだ。そなたを正式な正妃とするための手続きも入っている。が、こちらにも少々難題があつてな…」

「難題？・・・ってなに？」

「手を焼く相手が一人いてな。相手の家柄が高い分、うかつな行動もできかねるし。知つておくべき権利があるから、教えておく。齊蓮と並び称する家格の家の、娘がいる。侑紗南という。年は15歳。近いうちに、あわせることになるだろう。そのため、候補という形をとつたのだ。・・・すまないな。すぐに戻る。夕食は共にしよう。それまで、べつひでいってくれ」

「そうこうと、憂いを含んだ目で鈴音をみつめ、そばまでくると抱きしめ、ぽんぽん、と幼子をあやすように頭をかるぐたたいてから、紫蘭は仕事へと向かっていった。

「・・・ライバル登場、つてことになるのよね？その子と争うつてこと？まだ私、陛下や王妃様にお会いもしていらないのに。大丈夫かなあ。うつん、紫蘭を信じよう。大丈夫よ、きっと」

うとうん、と納得して鈴音は紫蘭が帰るまでの時間つぶしを、どうしようかと思い悩んだ。

3・憩いのとき（後書き）

候補とした形の理由を書いてみました。これから大変そうです

4 思案の時間

紫蘭が帰るまでの間、どうするか？少し考えて、情報がやはり足りないと鈴音は思った。今は情報が欲しい。琉香に聞いてもよいのだが、齊蓮に聞いた方が多くの情報が入るかもしれない、と思い琉香にたずねることにした。

「琉香。齊蓮様は、どうされているかしら？お時間を取つていただきたいのだけれど。お聞きしたいことがあります」

「はい。すぐに手配いたしますが、旦那様にも時間の都合がござります。急ぎであれば、早馬がよづりますよ」

「そうね。お願いするわ、謁見の後鈴音がお会いしたいと伝言をお願い」

かしこまりました、と琉香は王太子宮の侍女に後を頼み早馬の手配にいった。その間、窓から王太子宮の外の景色を見てみる。思わず息をのんだ。

（大きい・・・齊蓮様の屋敷も大きいと思つけれど、それと比べても、いつも比べないくらいに大きい）

「いかがされましたか？ああ、王太子宮の外の景色にござりますね。ここからの景色は見ものだと以前、王宮勤めのものに聞いたことがござりますわ」「琉香。手配ができたのね、ありがとうございます。お返事はいつのひ、もらえるかしら？」

「そつでござりますね・・・今からだと夕食前か途中くらいには返事の早馬がくるでしょう。夕食までの間、いかが過ごされます？鈴音様」

「少し休むわ。・・・思いのほか、疲れてるのかもしないわ。気

が抜けたみたい。一時間ほどしたり起じしてられる?」

「じゆるりと、お休みくださいませ」

返事を聞いてからベッドに向かい、ゆっくりと体を横たえる。すぐに睡魔が襲つてきてまぶたが落ちていく。鈴音は睡眠りの世界の住民となつた。自分が思つたより、疲れていたのか、一時間たつても鈴音は起きようとした。琉香が起にすも、起きる気配はなく。それから30分ほどしてから、鈴音は再び田原めたのだった。気がだるげにベッドから身を起こす。

「う・・・ねはよつ、琉香。こま、何時?」

お田原めにじやれこますね。よう眠らせておいででしたよ。もう、紫蘭様との夕食の時間にじやれこます

「えー? ほんと? ? ? ?」

その一言で一気に田原が覚めた。鈴音のその様子に、琉香がくすぐると笑う。それをみて、まだ夕食まで時間があることに気づく。

「もし、琉香ったら。まだ時間あるじゃないのよ」

「ふふつ。申し訳ありません、鈴音様。正確には、あと一時間にござります。それまでに湯あみをして、お召しかえをいたしましょう」「そうするわ。衣装は、控えめなものにしてね。来るときは少し華やかに感じたから」

「では、そのように。もう湯あみの準備はできじやれこます。こちらへどりつべ」

琉香の先導のもと、湯あみ処へいき丁寧に体を洗われる。これは、琉香だけでなく、王太子宮の鈴音つきの侍女たちも手伝つ。こちらの世界にきてしばらくなは、自分で体べらじ洗える、と抵抗したものだが、それが彼女たちの仕事なのだ、とわかるとそのうち抵抗もし

なくなつていつた。恥ずかしいのには、変わりないが。。そうして、香油のマッサージを終え、今度はクリーム色っぽい衣装に身を包む。優しい印象を伝える色合つだ。

「これなら、大丈夫ね」

「お似合つにござりますよ。それでは、ご夕食の方は別のお部屋に用意してござりますので、向かいましょうか」

「そうね、遅刻はしたくないし。紫蘭が先についてたらいけないし、向かいましょう」

鈴音は、琉香を連れ、「食事の間」に向かつたのだった。

5・紫蘭の事情

「食事の間」につくと、まだ紫蘭はきていなかつた。まだ仕事がおしてゐるのだから。鈴音は着席し、紫蘭を待つこととした。

「鈴音様。食前酒の方はいかがなさいますか？桃酒のかるいものにいざいます。うかがつてから、いじ用意の方をと思いまして」

「いただくわ。ありがとう。・・・あなたの名前は？」

「『^{ほたる}』と申します、鈴音様。以後、お見知りおきくださいませ

董と名乗つた女性は、鈴音より2・3歳年上のようだつた。長い髪を高く結い上げ、凛とした瞳は、意思の強さをつかがわせた。考えていると、視線が合ひにっこりと微笑まれる。そのとき、紫蘭の訪れを知らせる声が響き渡つた。鈴音が視線をむけると、紫蘭がやあわてた様子で、席に向かい着席した。

「待たせてすまなかつたな。会議が長引いてしまつた、許してほしい

「いいえ。仕事はきちんとこなすべきよ。でも、ありがとうございます。急いできてくれたのね、嬉しいわ」

「ああ。まず、食事にしよう。話は食べながらといふことではな。董、食事の用意を」

「かしこまりまじていざります。食前酒は、本日桃酒となつております」

「ああ、頼む」

董が後ろ女間に田配せをすると、料理が続々と運ばれてきた。斎蓮の屋敷で多少、慣れているとは思つたけれど、料理の数やそれを運ぶ人数はやはり、王太子宮のほうが多くて目をぱぱぱりとしてしま

つた。

「まずは、乾杯の方を。初めての食事に、乾杯！」

「乾杯！よろしくお願ひします」

席が離れているため、お互い杯を掲げて乾杯したあと、飲みほす。かるいもの、と聞いていたが思いのほか度数が高く、せき込んでしまう。大丈夫か、と心配げにきかれ若干涙目になりつつ、大丈夫と答える。どうも、日本の尺度ではかつたのがいけなかつたらしい。

「食事を共に、と言つたのだが、もちろん初めてここへきたというのもある。これからも共に食事をと思っているが、聞きたいことがあるだろ？」と思つてな。すでに、齊蓮にも早馬を飛ばしたそうではないか？

「ええ、そう。齊蓮様にも聞きたいことがあつたし。紫蘭にもよ。あなたからじやないと聞けないことも、あるはずよ。そうでしょう、紫蘭？」

「わかつてゐる。まずは、軽く食事といつて。空腹では、まわる頭もまわらぬぞ？」

それもそつだ、と思い首を縦に振り、同意の意を示す。そのあとは、静かに食事を勧めていく。お互い無言も変だと思つていた矢先、琉香が鈴音の後ろに控え、報告する。

「お食事中のところ、大変失礼致します。旦那様よりの伝言ござります。謁見のあと、控えの間にて会い、話をしようとのことござります。では、失礼します」

ありがとう、と礼を述べ、紫蘭に視線を向ける。待つていたかのように、紫蘭はこちらをじつと見つめていた。真剣ともいえる視線が、

目があつたとたん、ふつと柔らかな視線にかわる。緋色の瞳が柔らかくなるときが、鈴音は好きだと思った。彼の表情で一番好きと言えるかもしない。

「時間がとれたようで、よかつた。あやつも、最近は仕事に忙殺されていてな。私でさえなかなか会えぬのだ。・・・さて、私からの話なのだが、よいか？」

「ええ。一番聞きたいのは、あなたからだから。話して、紫蘭」

かちや、とどちらからともなく箸をおき、見つめあう。

「別れ際に話した、侑家のことだ。私がそなたを話を斎蓮からきくまでは、家柄や表向きの評判から、侑家の紗南が正妃候補の第一にあがっていた。だが、私も父王も侑家をこれ以上のさばらせる気はない。私が将来、王になつたときに隣にたつのが、侑家であつてはならないのだ。そこで、信頼のおける李 齊蓮のもとに異国の中のが世話になつているときいてな。噂だけでは心もとない。斎蓮から話を聞いてみたのだ。そして、そなたに会いにいった」

そこまで話した後、紫蘭は鈴音を正面から見つめた。自分の探すべきものがみつかつた、というような嬉しげな感情をこめて見つめたのだ。思わず、胸に手をやつた。熱い視線に、体が少しづつ熱くなる感じがした。

5・紫蘭の事情（後書き）

想が叶はなかったので、ここに記します

6・不安と甘酸っぱさ

「最初の反応で決めようと思つた。どんな人間か、第一印象が大事だからな。そして、そなたは私に期待にこたえる形となつた - この娘なら、と思つたのだ」

それが、正妃候補とした理由? 侑家に対抗するための? それとも、他にも・・・?

「それだけなのか、と思つたか? 他にもある。侑家の他にも、有力貴族たちが自分の娘を正妃にとその座を狙つている。家柄だけが良い娘たちばかりだ。そのような家の娘をあげても、父親が外戚として力をつけ、発言権が増すばかり。国事にまで、口出しされるようなことがあつてはならぬのだ。わかるな?」

「ええ、多少政治の世界はわかるつもりよ。そのために、家柄と機転のきく娘がほしかった、というわけね?」

「それが大きいだろう。だが、それだけの娘なら探せばいるだろ?。私は、鈴音だからこそ、そばにいてほしいと思つている」

- 私だからこそ、そばに? その意味は、どうとればいいの? 勘違いしちゃうよ、紫蘭。もしかしたら、帰れるかもしない日本。帰れるかも、といつ、一縷いぢる の望みを持つてゐるのに、違う望みを持つてしまつたらそのとき、私はどうしたらいいの・・・

「どうかしたか、鈴音? 気分でも悪いのか? すまない、話を詰め込みすぎたか。今日はここまでとしよう、ゆっくり休むがいい。・・・不安に思うことがあるのであるなら、相談くらいはしてくれ。そうしてもらえると、嬉しい」

「ありがとう、紫蘭。お言葉に甘えて、機会があれば相談させても

「うわね。今日は、一緒に食事ができてよかったです。それじゃあ

「鈴音、じゅりをむいてほしい」

「え？」

紫蘭に背を向けかけた鈴音だったが、声をかけられふりむくと、頬に手をあてられちいさく額に口づけられた。くす、と笑みがこぼれる。不安がよぎった心を、彼はよんだのだろうか？小さな気遣いが、すこしづつ心中に沁みわたっていき、大きくなつていった。

7・謁見（1）

謁見の日の朝早く、鈴音は日が覚めた。何かあるときには、早起きしてしまひ個性からかもしない。琉香にいつもより丁寧につけてもらい、淡い緑の衣装に身を包む。さわやかな色の衣装が、鈴音の優しい心を語っているかのようだつた。

「準備よしーあとは、迎えがくるのを、待つだけ・・・」

「緊張されておいでですのね？わかりますわ、そのお気持ち。む、茉莉花茶をどうぞ。気を落ち着けるときに、飲むお茶ですの」

「ありがとう、琉香。これで、緊張がほぐれたらいいな」

受け取りながら、ゆっくりとひと口、口に含んでみる。日をつむり、香りを楽しむ。少しではあるが、緊張がほぐされる感じがした。すぐには効かないだろうが、香りと味が気を確かに落ち着けるものであつた、というのあるかもしれない。時間をかけて、ゆっくりと飲みほし、机にそっと置く。

「王太子、紫蘭様お越しにござります。鈴音様、お支度を」

「今、準備整いました。知らせてくれてありがとうございます、黒」

「いいえ、そのようなお言葉、もつたいのうござります。ですが、ありがとうございましたね。では、こちへ」

黒の先導をつけ、後ろに琉香を従えつつ、紫蘭のもとまでいく。今日の紫蘭はいつもの略装とは違い、王のもとへ謁見するにふさわしいといえる、王太子の正装に近い衣装だった。王家を表す、緋色の衣装が紫蘭によく似合っていた。黒髪に、緋色がよく映えた。

「おはよつ、鈴音。準備の方、できているようだな。これから、王のもとへ謁見にいく。なに、父王は気さくな人物だ。そう硬くならずとも、よいぞ」

「おはよう、紫蘭。うん・・でも、やつぱり緊張は完全にはとけないよ。へましないよう、頑張るけど何かあつたら、助けてね？」

「そなたがへまするようには見えぬが、約束しよう。大丈夫だ。

さあ、手を」

紫蘭が手をさしだしてきたので、そつと手をかさねた。緊張のため、やや手が震えていたかもしない。謁見の間へ、一步一歩、歩みを進める。やがて、扉の前につく。ゆっくりと、扉が開かられていく。それは、これから鈴音の運命の扉を開けるような、おじやかな感じがした。

7・謁見（1）（後書き）

*茉莉花茶・・・リラックスしたいときに飲む中国茶。

明日は、更新をお休みします。

8・謁見(2)

「謁見の間」へ入室し、静かに膝を折り、頭を垂れて王と王妃が現れるのを待つ。そして。

「宋国国王、趙慧^{ちょうけい}様、並びに王妃、茜花^{せんか}様おなりにござります！」

ついにきた。王と王妃、初の対面である。胸が高鳴るのを感じながら、王の言葉をまつ。表をあげよ、と静かな声がかかつた。ゆつくりと、顔をあげ王を正面からみつめた。威厳に満ち溢れ、慈愛に満ちている人物だった。ついにきた。王と王妃、初の対面である。胸が高鳴るのを感じながら、王の言葉をまつ。表をあげよ、と静かな声がかかつた。ゆつくりと、顔をあげ王を正面からみつめた。威厳に満ち溢れ、慈愛に満ちている人物だった。その眼差しの中に今までどれだけのものを、見出してきたのであらうか。

「 拝謁が叶い、望外の喜びにござります。陛下、王妃様。李齊蓮が娘、鈴音にござります」

「よいよい、そう硬くなるな。鈴音、そなたに会えるのを楽しみにしていたぞ。」「 拝謁が叶い、恐悦至極にござります。陛下、王妃様。李齊蓮が娘、鈴音にござります」

「よいよい、そう硬くなるな。鈴音、そなたに会えるのを楽しみにしていたぞ。紫蘭があまりに、褒めるのでな。どのような人物かと思うておつたのだ。なあ、茜花？」

「はい、陛下。わたくしも、楽しみにしておりました。いずれ、義理の娘になるかもしだれぬ娘です、仲良くしておられますわ」

「ひとつ、無邪気に微笑む王妃。王とみつめあう姿は、長い間培

われいの情愛を深く感じさせた。ありがと「いやこます」と返答し次の言葉を待つ。

「今まで、紫蘭に取り入ってきた娘たちは家柄と氣位だけが、高いだけの娘たちでな。女を見る目を養え、と幼き頃より言い聞かせて育てたのだ。そして、20歳にして、そなたという娘を見つけ出した。今はまだ、候補として暮らすようこつてはあるが、忌憚なくいうべきことがあれば、こうがよい、斎蓮の娘よ」

「言つべきことがあればいいえ、と王はいったが口元は笑えど目は笑つていなかつた。試されている。気をくだ、といふのは「王」ではなく、もともとの性格のことだつて。「王」としての顔は、厳しいものだ。息子につけてもよい娘か、試されている。「ぐくり、と誰かののどがなつた気がした。

「いやいません、陛下。このように、お会いできただけで私は満足にござります」

「・・・そうか。合格だ、鈴音よ! そなたが、分をわきまえず何か申しておつたら、いくら斎蓮の娘といえど、容赦ないとこころであつたぞ。すまぬな、試すよつなことをして。これも王としての責務なのだ」

「お人が悪つござりますよ、陛下。鈴音さんも、ごめんなさいね。『控えの間』に斎蓮殿がござれています。そちらへ向かわるるようじいわ。今日はお疲れ様でしたね」

「それではな、鈴音。また、会おうぞ。紫蘭、よい娘と会わせてくれたこと、感謝しよつ」

王妃も知つていたのだ。知つていて黙つているよう言われたのだろう。が、怒る気にはならない。子を思つ親心からだからだ、退出の意を告げられ、全身の力がぬけるようだつた。退出する前、深く頭

をさげ最高礼をしてから、紫蘭とともに「謁見の間」を退出した。

「すまなかつたな、鈴音。謁見中は黙つておくよつ、言われてたのでな。ひとりで質疑応答な形で不安であつたか？」

「少しほはね。素敵なご両親じゃない。試されるのは当然よ、大丈夫。早く、齊蓮様にお会いしましょう。もつ何日もお会いしてない氣分だわ」

んー、と背伸びをかるくしながら、大仕事を終え満ち足りた気分の鈴音だった。久しぶりに齊蓮に会えることが、とても嬉しく感じた。

8・謁見（2）（後書き）

一日ぶりの更新です 王との対面がようやくできました。次は齊蓮様ですw

9・不当な拘束

謁見を終え、二人は「控えの間」へ向かっていた。そういうえば、と鈴音は思った。第2王子様と謁見でお会いする予定だつたはず。・・・予定が変わつたのだろうか？王子様とて暇ではない。きっと何か、事情があれりなのだろう。そう考えながら、通路の角をまがろうとしたら、誰かにぶつかつて後ろに倒れそうになつた。すかさず、紫蘭が受け止める。

「わ、ご、ごめんなさい！大丈夫ですか？申し訳ありません、姫君」「い、いえ。大丈夫です」
「・・・遙翔。^{よつしょう}廊下は走らぬよう、言ってあつたはずだが。何かあつたか？いつも大人しいそなたが、慌てて走るなど」

鈴音がぶつかつた相手、それは宋国第2王子・遙翔だつた。紫蘭とは違ひ、全体的に優しい雰囲気を持つ遙翔。今でも、世の姫君方がほつておかしいような、容貌をしていた。数年もすれば、さらに周りが放つてはおかしいだろう。

「重ねて非礼を詫びます、急いでいたとはいえ・・・兄上、李齊蓮が「控えの間」にくるはずだったのですが、事情が変わりました」

「どうしたことだ？・・・この部屋へ入る。ここなら、立ち聞きされる心配もなかろう。まあ、早く。衛兵、まわりの警戒を！誰も近寄らせるな！」

「はっ！しかと承りました、殿下！」

呼ばれた衛兵は、周囲をさつと覗渡したあと、目で紫蘭に合図を送つた。紫蘭は頷き、鈴音たちと素早く手近にあつた部屋へと身を隠

す。もう一度、気配を探つてから大丈夫だと判断すると、お互にやや距離を縮めて話を始めた。

「予定では、齊蓮殿はこられるはずでした。貴族たちが結託しなければ。議会での権限を使い、齊蓮殿を屋敷に拘束したのです。罪状はありません。不当に拘束されたのです。鈴音殿を兄上の正妃候補とした、娘は國のものにあらず、異國のものを殿下に近づけ、誑かし外戚としての権力を手に入れるつもりなのだろう、というのが彼らの言い分だそうです・・・」

「！なんてこと・・・齊蓮様、わたし・・・」

「気をしかと持て、鈴音！大丈夫、齊蓮は無事だ。何もされてはない。父に再度謁見を申し入れる！遙翔、鈴音をわたしの宮の自室に送り届けてくれ。護衛をつける・ 頼めるな？」

「はい、おまかせを、兄上。私が鈴音様をお守りいたします

それを聞くと、青ざめた顔の鈴音を抱き寄せていつかのよつこ、ぽんぽんと頭をなでたあと、身を翻して、出て行った。鈴音は泣きそうになつたが、きつ、と顔をあげると心を鼓舞した。ここで負けてどうするの！たとえ、候補でなくなつても、私が齊蓮様をお助けしなければ。心にそう誓い、遙翔王子に付き添われて鈴音はひとまず、自室へと戻つたのだつた。

9・不当な拘束（後書き）

貴族たちが動き始めました。斎蓮様出すつもりが、展開変わっちゃいました。

登場人物紹介？

・ 神崎 鈴音 18歳。女子大生。宋の国にトリップしてしまった、李 家の 齊蓮に保護され、養女となる。日本に帰りたいと思いつつも、紫蘭に惹かれているところもある。栗色の髪に茶色がかつた瞳をしている。

・ 緋 紫蘭 20歳。宋の国の王太子。齊蓮より鈴音の話をきいて会い、信用できる娘として、正妃候補という形で鈴音をそばにあげる。黒髪に、緋色の瞳の持ち主。眉目秀麗。鈴音自身に惹かれつづり。

・ 李 齊蓮 50歳。宋の国の重鎮。ひとりでいた鈴音を保護し、養女とする。妻がいる。理知的な面差しの持ち主。鈴音のよき理解者。現在、拘束されている。

・ 緋 趙慧 56歳。宋の国の王妃。王の従姉妹でもある。年齢と動しようとする。鈴音のことを試したりもする、子思いでもある。

・ 緋 茜花 42歳。宋の国の王妃。王の従姉妹でもある。年齢とは裏腹に、とても若く見えたりもする。傾国の美女のじとき容貌。

・ 緋 遙翔 11歳。もうすぐ12歳になる。宋の国第2王子。紫蘭いわく「やんちやで手におえない」が、鈴音には王子としての顔を見せる。優しげな風貌をしている。紫蘭とは性格・態度ともに対照的。

・ 琉香 19歳。齊蓮の屋敷の侍女だったが、鈴音の輿入れ（表向）に伴い、王太子宮へ。鈴音のことによくわかっている。たまに

からかうのが好き（？）

・螢よし 20歳。王太子宮に勤める侍女。鈴音に優しく接する。普段

は長い髪を高く結い上げている。怒ると怖い面も。

登場人物紹介？（後書き）

人数が増えてきそうなので、ここで人物紹介を簡単にいれておきます。次は続きになります イメージイラストがあればいいなあ、なんて（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6705y/>

夢想花

2011年11月29日19時54分発行